

(4面から)

【在宅療養支援診療所】(その4)

Table with 2 columns: 質問 (Question) and 回答 (Answer). Contains 3 numbered items regarding home medical care support clinics.

【栄養保持を目的とした医薬品の品目について】(その4)

Table with 2 columns: 質問 (Question) and 回答 (Answer). Contains 1 item regarding medical products for nutrition maintenance.

【ベースアップ評価料】(その4)

Table with 2 columns: 質問 (Question) and 回答 (Answer). Contains 2 items regarding base adjustment evaluation fees.



江戸城本丸を歩きましょう。将軍と大名の専用口大手門から入ります。元は木橋でした。橋前の広場では、大勢の従者が殿の下城を待つておりました。門の白壁にある鉄砲狭間をご確認ください。中へ入ると三の丸です。小大名や旗本は南の内桜田門から三の丸

相模原市中央区 小沼 博

江戸城本丸



に立ちます。さらに少し進むと大手三之門です。広い水堀の橋台地に下乗橋が架かり、現存する正面

の石垣の間に高麗門がありまして。御三家以外の大名はここで駕籠を降り、数人の供を連れて二の丸に入って行きました。大手三之門の枳形虎口からは、精巧な切込接の石垣が続きます。巨石石積みのは瀬戸内海、黒は伊豆から運ばれてきたものです。中之門には、有名な明治初期の写真があります。そこから、ダウンロードして見比べると門の本来の姿を知ることができます。中之門を抜けると、石垣に圧倒される坂道です。心細い気持ちで歩いたお殿様もいたに違いありません。そして御三家も駕籠を降りる中雀門を過ぎれば、今は大芝生になっ

ている本丸跡となります。富士見櫓と富士見りして帰ります。(次回は山中城)

医科学から読み解く西洋画家の物語 ~第四回~



ピエール＝オーギュスト・ルノワール『ピアノに寄る娘たち』1886年、オルセー美術館(事務局撮影)

慢性関節リウマチと闘ったルノワールの創造力

川崎市川崎区 谷本 哲也

手が変形しても絵筆を離さなかった印象派の巨匠。車椅子から描いた大作、工夫された画材の固定法。現代の患者の生活の質(QOL)向上にも通じる、適応と創意工夫の物語(毎月1回連載)。

印象派の巨匠ピエール＝オーギュスト・ルノワール(1841-1919)の名前を聞けば、誰もが色彩豊かで温かみのある作品を思い浮かべるだろう。しかし、この偉大な画家が人生最後の20年間を、慢性関節リウマチと闘いながら創作活動を続けていたことを知る人は少ない。ルノワールの慢性関節リウマチは50歳の1892年頃に始まったとされる。病状の進行とともに手指の変形や肩・肘の関節の強直が進み、最終的には歩行も困難になった。それでも彼は決して絵筆を置くことはなかった。むしろ、身体的な制約が増すにつれて、より鮮やかで生命力に満ちた作品になっていった。ルノワールの適応戦略は現代の患者にとっても学ぶべき点が多い。彼は問題焦点型と感情焦点型の両方の対処法を巧みに使い分けていた。物理的な制約に対しては、水平シンターとクラックを使用し、大きなキャンパスの特定の部分を手の届く範囲に持つてくるシステムを考案し、筆を握れなくなると柔らかい布で包んだ握りごぶしに筆を固定してもらった。パレットは膝の間に挟み、後には車椅子に取り付けて左右に回転できるように工夫した。最も素晴らしい作品の

心理的な適応においても、活動のペースを調整し制限を受け入れ、絵画を通じて人生の意味を見出し続けた。ただし、家族や友人の支援を受け入れながらも、決して自分を障害者と見なすことはなかった。特に印象的なのは、1912年の出来事である。1907年以降、次第に歩行が困難になり、車椅子生活になっていった。著名な医師の治療により2年ぶりに歩いたものの、数週間後に歩いたものを放棄した。「歩くことは全ての意志が必要で、絵を描くための力が残らない」と語ったのである。この決断は、彼にとって絵画がいかに重要な存在であったかを物語っている。晩年の慢性関節リウマチが最も重篤な状態にあった時期に、最も素晴らしい作品の

新聞「初夏特集号」投稿募集

保険医新聞「初夏特集号」(2026年8月5・15日号)は、会員からの投稿を中心に作成いたします。下記の自由投稿のほか、随筆、写真・絵画、俳句・短歌などの投稿もお待ちしております。《投稿テーマ》なし(自由)《文字数》700文字以内《厳守》《締切り》6月15日(月)必着《送付先》郵送、FAX、メール《kanahoi-shinbun@hoken-i.co.jp》等でお送りください。ご不明点は新聞部まで(TEL 045-313-2111)。

※参考サイト https://emuseum.nich.go.jp/detail/content_base_id=100813&content_part_id=031&lang1=fr&webview=